

保育における音楽表現技術に関する一考察

－学生のレポートを通して－

鶴 巻 保 子

A Study of Musical Expression Skills in Child Care

－Through Student-Written Papers－

Yasuko Tsurumaki

保育者に求められる音楽表現技術は、特定の演奏技術を重要視するのではなく、子どもの表現の芽生えを受け止め、音楽を通して子どもとどのようにかかわっていくかが肝要である。当然、子どもの表現を支え、活動を展開するピアノや歌唱の技術を身につける必要はある。保育士養成課程改正後の表現技術では、保育者は子どもの様々な表現に対応できる音楽性と柔らかな感性を備え、子どもから生まれる「表現」を大切に育むことが重要とされている。

本稿は、音楽表現技術の授業における「輪唱」と「わらべうた」の授業実践が、どのように学生の「感性と表現」を育み、音楽表現技術の習得につながるかを探るものである。

Key Words: [音楽表現技術] [歌う] [聴く] [柔らかな感性] [協働性]

(Received September 26, 2016)

I. はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻の「音楽I」は、「子どものうた」の歌唱活動を主軸とし、音楽表現技術の基礎を学習する。この授業は1年生対象、前期必修であり全員が履修する。授業の到達目標は、学習した音楽表現法を保育の実践力につなげることである。学習経験の浅い1年次に音楽表現技術の成果がすぐに結びつくものではない。だが、授業における学生の表現意欲と学ぶプロセスに学生の音楽表現の飛躍的な向上を見ることができ。それは保育の音楽実技だからこそ、学生が「表現」し、学び合うことを通して音楽する心を育んでいるのだと考える。

「表現」は感性と関連づけられた領域であり、幼稚園教育指導要領には「感じたことや考え

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

たことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする¹⁾と示されている。幼児は特に「身近な環境とかかわりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見付け、美しさや優しさなどを感じ、心を動かしている……これらを通して感じる、考えること、イメージを広げることなど経験を重ね、感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていく²⁾とあるように、子どもの表現は子どもの育つ環境と人とのかかわりに起因していると考えられる。従って「保育の表現技術」は「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や環境とのかかわりを様々な遊びを通して展開していくことが重要であり、このような子どもの表現にかかわる科目として、音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現がある。これらの表現技術の学習を保育との関連で修得できるようにすることが必要である³⁾としている。

保育者は、子どもが表現したい「表現の芽」を受け止め、あるいは期待し、理解する心と柔軟性を持った対応力、すなわち保育者自身の柔らかな感性が求められるであろう。言うまでもなく、保育者として子どもの音楽活動の中から生み出される表現に対応できる音楽性、ピアノや歌唱表現技術を備える必要がある。

筆者は先行研究(鶴巻, 2012)において、「音楽Ⅰ」の授業を終えて、学生たちの表現技術の学びをレポート課題、音楽劇創作についての記述よりまとめた。そこには少ない時間内に、発表に向かうプロセスにおける協働の学び、グループごとの取り組みによって得た達成感、協働性、創造性の学びが表れ、「表現」する楽しさを実感し、保育の音楽表現に対する意識の向上が確認できた⁴⁾。

本稿では、授業の新たな一実践である「輪唱」と「わらべうた」の二つの実践を取り上げた。輪唱はレポート課題である「授業の感想と意見」を求める記述より、「わらべうた」は授業にみられた学生の表現意欲に着眼し、アンケートより考察を試みた。これらの二つの実践が、柔らかな感性を育み、音楽表現技術の習得にどのようにつながるかを検討したい。

Ⅱ. 授業の概要

本学の音楽科目の概要は、鶴巻(2012)に示されている。このうち、「音楽Ⅰ」⁵⁾は「子どものうた」の歌唱、うたあそび(手あそび、わらべうたあそび)楽器あそび、創作(歌う、音楽に合わせて身体を動かす、リズム楽器によるあそび、創る活動)を楽しみ、子どもの音楽表現法を学び、保育の現場で音楽活動に活用する基礎、実践力を身につけることをねらいとしている。授業では、主に幼稚園や保育所で一般的に取り入れられている音楽活動を実践している。音楽Ⅰの学びの成果としてグループ毎の短い音楽劇を発表する。表現力、創造性を高めるため、歌うこと、及び歌いながら振り付けをして身体で表現すること、動きを伴う遊びなどを替え歌にして遊ぶこと、簡易なリズム楽器を使用して奏でることなど多様な表現法を学習し、音楽劇創作の活動へ進める。ほかに音楽表現の視覚的な模範となるDVD①「天使にラブ・ソングを」のデロリスが聖歌隊にレッスンをする場面、②「サウンド・オブ・ミュージック」のピクニックでの〈ドレミの歌〉が歌われる場面を視唱した。授業の概要を表1に示す。

表1 授業の概要

回	内 容
1	保育における表現技術/こどもの音楽について 季節の歌 (4月の歌)
2・3	歌唱 季節の歌 (5月～8月) 手あそび
4・5	歌唱 季節の歌 (9月～12月) 身体あそび
6～8	歌唱 季節の歌 (1月～3月) 歌あそび・楽器あそび DVD①
9～11	わらべうた 手合わせ遊び 遊ばせうた 絵描きうた 音楽劇創作/準備
12	生活の歌, 輪唱 音楽劇創作/グループ発表
13	歌唱 輪唱 音楽劇創作/グループ発表
14	歌唱 音楽劇創作/グループ発表 DVD②
15	まとめ 歌を演ずる 発表

対象は平成28年度, 生活学科こども学専攻1年生70名2クラスである。

(Aクラス35名, Bクラス35名)

- レポート課題設問
1. 音楽 I で学んだことを述べ, どのように生かしたいと思いますか。
 2. わらべうたの意義を述べ, どのようにわらべうたを生かせると思いますか。
 3. 授業の感想, 意見を述べてください。

Ⅲ. 輪 唱

1. 輪唱の経験

「子どものうた」は斉唱がほとんどである。筆者は, 学生が旋律の歌唱だけでなく, 声の協和による心地よい音楽を感受するために簡易な合唱教材を組み込んでいる。自分の声と仲間の声を聴きながら歌うことにより, 声が合ってくる, 声が響き合うという体験が重要である。「合唱するということはまさに包むような音をつくり出すこと……全体として自分を包むような音に変えていく」⁶⁾のであり, 創造活動でもある。学生たちが自分の身体から発する声を使い, 音楽に親しむ身近な活動であり, 音楽表現を豊かにする基礎につながると考える。ただし, 女声合唱曲に取り組むには, 発声訓練や基礎練習, 読譜に相当な時間を要するため, 易しい曲, 保育の表現に活用できる曲を選曲することが肝要となる。以前「草競馬」の2部合唱と「静かな湖畔」の輪唱を取り扱った際, これらの歌を知らない学生が少なくなく, さらに音楽の経験が浅いことや音楽基礎(読譜などソルフェージュ力)が不足しているため, 音程が取れないことやリズムに乗れないことで難航し, 限られた時間の中で全員が2部合唱の楽しさと響きの美しさ, 達成感を味わうことが難易であった。従って技能的に無理なく単純でだれもが一度は歌ったことのある歌として「かえるの合唱」と「きらきら星」を教材とした。ここでは「きらきら星」について紹介したい。

「きらきら星」は童謡として様々な言語に翻訳され, 広く世界で愛唱されている。日本語詞も複数あるが, 表2の①②を採用し, 授業で太線内の歌詞を輪唱した。調性はへ長調である。

表2 きらきら星の歌詞

表記 ⁷⁾	1 節	2 節
①岡本敏明 作詞 外国曲	キラキラそらに おほしさまひかる ダイヤモンドのように ルビイのように キラキラそらに おほしさまひかる	キラキラそらに おほしさまひかる かみのみさかえ あらわすひかり キラキラそらに おほしさまひかる
②Mother Goose	Twinkle, twinkle, little star, How I wonder what you are! Up above the world so high, Like a diamond in the sky. Twinkle, twinkle, little star, How I wonder what you are!	As your bright and tiny spark, Light the traveller in the dark,-- Though I know not what you are, Twinkle, twinkle, little star, Twinkle, twinkle, little star, How I wonder what you are (5節) ⁸⁾
③武鹿悦子 作詞 フランス民謡	きらきらひかる おそらのほしよ まばたきしては みんなをみてる きらきらひかる おそらのほしよ	きらきらひかる おそらのほしよ みんなのうたが とどくといいな きらきらひかる おそらのほしよ
④フランス童謡	おそらでおどる きれいなほしよ びかびかびかり きらきらきりり おおきなほしも ちいさなほしも	おそらでおどる きれいなほしよ びかびかびかり きらきらきりり あちらのほしも こちらのほしも

2. 輪唱の感想

設問3「授業の感想，意見を述べてください」の中で61名が輪唱「きらきら星」について、及びその他の記述をしていた。「きらきら星」の実践に関する記述を7項目に分類し、それらの抜粋を表3に示した。「きらきら星」の輪唱に対して感じたことを表した声であるので一文に複数の項目が含まれる文章は、分割していない。また二～三文で、意味がより伝わるものも分割していない。原文のまま記載したため、厳密な分類となっていない。

- a) ハーモニー b) 一体感 c) みんなで d) 気持ちの変化
e) 音楽経験・技術 g) イメージ h) 子どもたちと

表3 きらきら星の記述の分類と内容

<p>a) ハーモニー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何回か歌っていくうちに皆の声がハーモニーになりました。そうしたら楽しくなり、ノリノリになり最初では考えられないくらい綺麗なハーモニーを皆で作ることができました。 ・みんなで歌うことや調和の中に自分がいるということは幸せなことなのだと思います。 ・周りの声を聴くことで綺麗なハーモニーになっていて、自分でも鳥肌が立つことができました。 ・各列に分かれたことで素敵なハーモニーが生まれ、自分の声と体が響いていた時には感動しました。 <p>b) 一体感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は声の大きさが違ったり、恥ずかしかったりバラバラでしたが、だんだん揃ってきて綺麗で気持ちが良い響きになり不思議だと思いました。みんなで一体となるのは、歌う楽しさが全然違うような気持ちでした。 ・みんなで色々な歌を歌いましたが、「きらきら星」の輪唱が一番心に残っています。な
--

ぜんらみんなの声がとてもきれいで、ハモリがずっと心の中にしみこんで癒されました。最初はみんなバラバラだったけれど、何回か歌ううちにみんなの声が一つになってくるのが嬉しかった。

c) みんなで

- ・みんなの歌声が教室中に反響し、続いて大きなホールの中にいるような感覚を覚えました。
- ・輪唱は自分以外に人がいないとできないものです。自分が歌った後に他の人が歌い、みんなが歌うことによって人と人との繋がりの温かさを感じることができました。美しいハーモニーがこのようにして生まれるのかと感動しました。
- ・歌詞もいつも歌っている馴染み深いものとは違って、英語でも初めて歌ったにもかかわらず、だんだんとみんなの声が揃い、息が合ってきて美しく教室に響いて歌いながら感動したことを覚えています。

d) 気持ちの変化

- ・今までにも輪唱をしたことがあるのでそれほど期待はしていなかったのですが、いざ歌ってみるととても綺麗で素敵だと思いました。
- ・幼稚園や小学校、中学校で何回も輪唱をしたことがあったので、そんなにすごいものではないだろうと期待していませんでした。でも歌ってみると綺麗なハーモニーに本当に驚きました。
- ・輪唱にしたら、予想以上に楽しくなり、授業で歌った歌の中で一番楽しめました。
- ・輪唱でみんなが一体となるのは、歌う楽しさが不思議と変わりました。
- ・つられそうになってもみんな和気藹々と歌っているので安心して歌いました。そうしたら歌っているうちに楽しくなりました。

e) 音楽経験・技術

- ・輪唱という歌い方を初めて知りました。知っている歌だったのですぐハーモニーができ、歌っていて楽しく気持ちよかったです。
- ・簡単だと思っていたけれど、実際歌ってみると前の人につられてしまって前の人と一緒に終わってしまったたりして以外と難しかったです。しかし何度か歌っているうちにつられなくなり、ハーモニーの中で歌っていることに感動しました。
- ・ずらして歌うのですぐつられていましたが、段々できるようになり、みんなの声が一つになっていくのがわかりました。
- ・きらきら星の英語バージョンがを歌ったことがなかったので新鮮で楽しかったです。

f) イメージ

- ・今まではただ歌っていただけでしたが、輪唱では星のイメージが変わってきたのが不思議でした。
- ・最初の「きらきらそらに」と「おほしさまひかる」いう歌詞と旋律が重なった時が印象的で、星が光るような光景が浮かびました。

g) 子どもたちと

- ・子どもたちともできると思うので輪唱を教えたいと思います。
- ・子どもが大好きな歌だと思うので子どもと輪唱もやってみたいです。
- ・歌を工夫して子どもといっしょに音楽を楽しみたいです。

3. 考察

関連する項目をまとめ、考察する。輪唱の記述の中でもっとも多かったのは、ハーモニーの美しさ、新鮮さについての驚き、感動体験についてであった。

a) ハーモニーについて b) 一体感 c) みんなで

みんなで声を合わせて歌い「きらきら星」のハーモニーを味わい、一体感を作り、集団でなくては味わうことのできない感動と、同じ時間の中で生じた響きを共有し共感したのである。皆川(1974)は「……じつに〈合唱する〉ということは、〈歌う〉ということと〈集団を作る〉ということ——人間のもっとも基本的な行為に、ふかく根ざしたものなのである」⁹⁾と述べている。筆者は入学して3ヶ月程の学生が、短大生活に慣れてきた頃であり、音楽活動に有する連帯感に支えられ、クラス全員の調和を求める心が一体となった時間であったと考える。

d) 気持ちの変化 e) 音楽経験・技術

輪唱に対して期待を寄せなかった学生も、美しいハーモニーに驚き、楽しい活動に変わった。すぐ歌えるところが輪唱の妙味であるが、他者の声を聴きながら歌うことが難易な学生もいたことは否めない。しかし輪唱の実践によって、音楽経験の不足を自覚する学生も、音取りに苦慮する学生も、聴き合う体験、協調してハーモニーを作る体験を通して、音楽を楽しむ心情や表現しようという気持ちに変化した。

f) イメージ

「きらきら」という擬音語を言葉の響きに合った歌い方で歌い、音楽にのせてイメージを表した。クラスメートと簡易なハーモニーで素朴な表現を楽しみ、星の響きをイメージできたという点において、輪唱が生み出すハーモニーはイメージを豊かにするという経験ができると考える。また「きらきら星」の歌の穏やかさ、優しさを4/4拍子または2/4拍子の拍子感を感じながら、声量をコントロールして歌うことによって、ハーモニーの心地よさを知覚し、感受したといえる。難しいと感じる学生にとっても和気藹々とした周りの温かい雰囲気を支えられたのである。

g) 子どもたちと

子どもたちに対してどのように歌うか。子どもが「感動体験を表したり、伝えようとするためには、何よりも安定した温かい人間関係の中で、表現意欲が受け止められる」¹⁰⁾ことから、子どもたちに歌を教える場合、保育者自身がその歌を好きになり、子どもたちが一緒に歌いたい気持ちになることが肝要である。子どもが人の声、音、音楽の不思議さを体験し、魅力的で面白い音楽活動を友だちや保育者といっしょに体験する環境を工夫することが必要とされている。子どもたちにとって輪唱活動は難易であるが、輪唱の美しさ、心地よさを聴かせたいという音楽的感受力と、歌を工夫して子どもたちと楽しみたいという学習意欲を高めるものになったと考えられる。

課外活動であるが、すこやか子育て交流館「りぼんかん夏祭り」において「こどもバンド」¹¹⁾出演の器楽合奏を最前列で聴いていた男児は、「きらきら星」の輪唱をする学生を注視していた(写真1)。2度目にみんなで輪唱を歌う際、その響きに包まれると、ただ見ているだけでな

く天井を仰いだり、後ろを振り返ったりして、反応を示したのである。子どもの「豊かな感性は、自然などの環境と十分かわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われる」¹²⁾とあるように、男児はじっとしていられなくなり、場を変えながら、母親のもとに戻った。学生は子どもたちの表情を見ながら、自然な発声で声をコントロールして声の響きを聴き合って歌った。自然で無理のない声で歌おうとする気持ちに変化したのである。

授業で「きらきら星」の簡易な輪唱実践に大きな反響があったことは筆者の予想外であった。保育者を目指す学生が、輪唱を新鮮に受け止め、その美しさや楽しさ、ハーモニーの心地よさを感じ、新たな発見や感動の経験を通して、主体的、協働的、創造的な学びができたことは、子どもたちに良い環境を整えるきっかけとなるのではないだろうか。これを基に柔らかな感性を持つ保育者の育みにつなげてほしいと思う。

IV. わらべうた

1. わらべうたの共感

27年度オリエンテーションキャンプの室内レクリエーションのゲームで「かもつれっしゃ」を行った。これのみで飽き足りず学生たち58名(29名×2クラス)は、即座に「だるまさんがころんだ」と「花いちもんめ」を行ったのである。筆者は23年度より連続してオリエンテーションキャンプに参加したが、学生相互の親睦を深めるためのレクリエーションに「わらべうたあそび」(写真2)が登場したのは初めてであった。学生が意気投合し、この遊びを通してつながろうとする光景を目の当たりにした。またわらべうたの授業では、生き生きとその活動を行い、一人が「歌詞が違う」あるいは「旋律が違う」と言って歌い始めると、他の学生はまた自分の遊んだ歌詞や節で歌い始めるなど、学生たちは相互の興味、関心、意欲、ノリの共有を高めた。

子どもの生活と遊びが変化する環境において、子どもたちが「わらべうた」で遊ぶことが少なくなったと言われるが、学生たちの幼少時の「わらべうたあそび」の経験はどのようなものであろうか、伝承わらべうたの受容を調べ考察した。

2. わらべうたについて

「わらべうた」は、一般に「子供の遊び歌。子供の日常生活である遊びのなかで創造、継承される音楽」¹³⁾とされる。小島(2009)はわらべうたの用語を「日本語を母語とする子どもたちによって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌を指すもの」とし、「学校教育におけるわらべうたの再考」において幼児教育では、社会性の育成が前端的であったが、音楽教育では、わらべうたを『歌』として、その音楽的特徴に関心を向けた¹⁴⁾と述べている。最近の研究では子どもの発達の弱さが指摘され、社会性、協調性の育成の観点からわらべうたを扱うことが重要視されている。また尾見(2001)は、幼児期からの心の教育の在り方が問われる中、「幼稚園・保育園において心の教育を取り戻し、調和のとれた人間形成のための保育内容としてわらべうたが、子どもの人間的発達におよぼす多面的な教育力を有している」¹⁵⁾と、積極的に取り入れる意義を理論と実践から論じている。

一方、わらべうたは「子供たちに歌われてきた歌でありあそび歌」であると同時に、また「子供たちに歌って聞かせる歌」¹⁶⁾とされる。大人が子どもを遊ばせる歌であり、子どもの発達に合わせた子育ての知恵が、言葉と結びつけられたものでもある。阿部(2002)は、子育ての道しるべとしてわらべうたを伝え、乳児と向き合って歌いかけるわらべうたの大切な唄として「子守唄」を挙げ、「赤ちゃんがゆったりした気持ちで、安心してねむるように、昔から決まった『子守唄』がありました。これは、子どもの気持ちを落ち着かせるばかりでなく、子どもがなかなか寝なくてイライラする大人の気持ちもゆったり落ち着かせてくれるものなのです」¹⁷⁾と語っている。近年、わらべうたは子育て支援事業の一環として提供され、保育におけるわらべうたの重要性についての研究も数多くあり、わらべうたが乳幼児の発達や親子のコミュニケーションを促す有効な手段であることが主張されている¹⁸⁾。授業では9回(わらべうたの特徴と手合わせあそびの実践)、10回(わらべうたと童謡の違いと遊ばせうたの実践)、11回(わらべうたの意義と絵かきうたの実践)で扱い、子どもの遊びうたであることと、大人が乳児をあやす時に歌った「遊ばせうた」について学習した。

3. わらべうたのアンケートと結果

11回目の授業の最後に以下の設問をすべて自由記述によるもので行った。複数回答および未回答のものもある。

(1) アンケート

- 1) わらべうたで遊んだ相手
- 2) 遊んだ経験のあるわらべうた
- 3) わらべうたの思い出

(2) 結果

表4 わらべうたで遊んだ相手

わらべうたで遊んだ相手	人
小学校の友だち	30
幼稚園・保育園の友だち	22
母親	21
祖母	14
兄弟姉妹	13
祖父	6
父親	4
いとこ	4
経験なし	1

表5 遊んだ経験のあるわらべうた

わらべうたあそび(曲名)	わらべうたの分類 ¹⁹⁾	人
はないちもんめ	鬼あそび	48
ゆうびんやさん	なわとび・ゴムなわ	47
おちゃらかほい	お手あわせ	40
だるまさんがころんだ	鬼あそび	38
ちゃちゃつぼちゃつぼ	からだあそび	18
お寺のおしょうさん	お手あわせ	17
かごめかごめ	鬼あそび	12
ずいずいずっころばし	からだあそび	8
あんたがたどこさ	まりつき	6
あがり目さがり目	からだあそび	6

(3) わらべうたの思い出

- ・子どもの頃から、親しんでいました。友達と手をつなぎながら、自然に歌って遊んでいたの
で、先生から教えてもらった記憶はありません。
- ・祖父母なのか、親なのか、幼稚園の先生なのか、誰に教わった遊びなのかハッキリと覚えて

いませんが、自然と歌が身について、歌に合わせて体を動かして遊ぶことが当たり前だったような気がします。音楽の授業で学ぶとは思っていませんでした。

- ・子どもの頃にたくさんしました。親にもたくさん教えてもらい、今思えば親子の信頼関係が築けたと思います。
- ・小さい頃、学校の休み時間に「だるまさんがころんだ」や「はないちもんめ」を他の学年の人たちと遊んでいました。家では妹と「おちゃらかほい」や「ちゃちゃつぽちゃつぽ」などを歌って遊んでいました。
- ・友達と遊びながら自然に歌っていました。楽しかった光景を思い出します。
- ・兄弟や友だちと「はないちもんめ」や「ゆうびんやさん」をして遊んでいました。合唱団に所属していた時、わらべうたをメドレーで歌ったことがあるのでよく覚えています。
- ・学校や家の近くの友達とじゃんけん遊びで何回も遊んでいました。
- ・母親と「あがりめさがりめ」をやっていたのを懐かしく思い出します。わらべうたがたくさんあるのに驚きました。
- ・授業で習ったわらべうたのプリントを母に見せました。母は懐かしいと言って私が幼い頃、やっていたわらべうたを思い出しながら一緒に歌ってくれました。
- ・3歳頃だと思います。私が眠れない時、母が子守唄のように歌ってくれました。
- ・お昼寝をする時、祖母のおひざに頭を置いて、祖母が「ねんねこしゃっしりまあせ、寝たあ子のかわあいさあ、おきて泣あく子はねんころり、ねんころりんころり、ねんころり」と歌ってくれました。懐かしいです。どんな気持ちで歌ってくれたのかわかる気がします。

4. 考察

アンケートより学生のほとんどは、子どもの頃わらべうたで遊んだ経験があり、遊んだことのない学生が1名いた。幼児期の遊びが変わり、わらべうたで遊ぶことが少なくなっても、子どもの遊びの中から生まれた伝承わらべうたが鹿児島県で生きていることを表している。また筆者の予想以上に、学生はわらべうたをよく覚えている。

まず遊んだ相手と遊んだわらべうたについて見てみたい。表4より、遊んだ相手は小学校の友だちが最も多い。次に幼稚園、保育園の友だちであり、これは園での活動と捉えてよいであろう。表5より、最も多く遊んだわらべうたは、「はないちもんめ」「ゆうびんやさん」「だるまさんがころんだ」「かごめかごめ」で、いずれも集団遊びである。小泉（1969）は、わらべうたは「本来、小学校4年生から6年生の児童が盛んに遊んでいた」²⁰⁾と伝えているように、学童期に子ども同士、異年齢で遊んだことを表している。次に多く遊んだのは「おちゃらかほい」「お寺のおしょうさん」のお手あわせである。お手あわせとは「せっせっせーのよいよいよい」の掛け声で始まり、相手の手の平を打ち合わせたり、手拍子をしながら二人または少人数で遊ぶあそびである。

次に「わらべうたの思い出」を見たい。わらべうたを学生は、幼い頃、生活の中で身近な遊びとして歌い、誰に教わったのでもなく、いつの間にか覚えている。母親、祖父母、少数であるが父親からも教えてもらっている。またわらべうたを単に歌として教えられていないことが示されている。「たくさんしました」「何回も遊んでいました」という記述から、幼い頃は「わ

らべうた」とは知らずに何度も繰り返し歌い遊んでいるうちに、自然に記憶に刻まれ、身体の中に享受しているのである。従って学生は、わらべうたを歌い始めると幼少期に遊んでいたように歌い、リズムに乗って身体が動くのである。これはわらべうたを共有することから生じる動作だと考えられる。

最後に「わらべうたの思い出」の中で、2名の学生の「子守唄」の記述に注目したい。母親と祖母が子守唄として歌ってくれたのは、眠らせうたである。祖母が歌ってくれた中国地方(山田耕作編曲)の眠らせうたの歌詞「ねんねこ しゃっしゃりませ 寝た子の かわいさ 起きて 泣く子の ねんころろ つらにくさ ねんころろん ねんころろん」と学生の記述した歌詞と幾分違っているが、学生は祖母の歌ったイントネーションを記憶したままの歌詞で記述したのがわかる。日本の子守唄の背景が感じられる悲哀さがあるが、祖母のぬくもりを感じないだろうか。これを聞いて孫(乳児)が寝付くのは、眠らせうたの意味を理解したというより、身近だった祖母や母親の聞き慣れた優しく温かい声の響きに包まれ、安心したからであろう。眠らせうたは乳児が最初に接する歌である。人間は母親の声をすでに胎児から聞き、母の心と結ばれている。乳幼児がもっとも好むのは「母親の声」である。また様々な音環境から、子どもに大きな影響を与えるのは、声である。従って乳幼児は、保育者の声の調子に反応し、保育者の語りかけや歌は、乳幼児にとって大切な音感受となり、その後の発達や人生に影響を与えるものである。穏やかな気持ちで、目の前の子どもを「慈しむ」心を声にして歌う表現は、保育者にとっても欠くことはできないであろう。

V. おわりに

本稿は、授業実践において「きらきら星」の輪唱と「わらべうた」の授業実践が、保育の表現活動にどのようにつながるかを考察するものであった。

輪唱とわらべうたの異なる実践において、共通するのは「歌う」ことである。音楽表現は「歌う」ことと同時に「聴く」ことが重要な要素であり、音楽表現の根幹として位置付けられている。「聴く」、「聴き合う」ことを意識することによって、心の耳で聴くことへと深まる。筆者は、保育の音楽表現において「歌う」ことと「聴く」ことは根源的な活動であり、聴くことによって感じ受けた内面を大切にしたいと考えている。保育者が一緒に歌ったり、子どもに語りかけたりする際の何気ない声は、豊かな音楽表現になり得るであろう。保育者の声やその表情は、聴覚の発達の著しい乳幼児に働きかけ、表現を生み出す要素であり、子どもの心や活動を育む環境の一つとなる。「きらきら星」の輪唱実践では、聴き合う時間の充実によって、学生個人の体験だけでなく、グループとクラス全体で聴き合う音楽体験を共有した。わらべうたは音楽に遊びの動作が付き、保育者は子どもに語りかけ、子どもの声を聞きながら遊びを展開できる。子守唄においては、わらべうたの温もりを通して子どもに寄り添う声と歌をもって表現できる。

肝要なのは、保育者が子どもの表現に気づき、見守り、育む柔らかな感性を持ち得ることである。輪唱とわらべうたの実践は、保育者に求められる柔らかな感性を育むために有意義な活動だと言える。

保育関連のニュースが絶えない今日、課題の山積する保育現場に巣立っていく学生が、保育

の本質を見失わず、子どもを慈しみ、音楽を通して子どもの生きる表現を豊かに育めるよう学生の音楽表現技術の向上となる授業実践であるよう、今後も努めたいと思う。

注

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館，2008年，158頁。
- 2) 同上。
- 3) 保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）7頁。
- 4) 鶴巻保子「保育者養成のための音楽表現技術における学生の学び」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要第42号』2012年，57-69頁を参照。
- 5) 同上，58-59頁。
- 6) 無藤隆『幼児教育のデザイン 保育の生態学』東京大学出版，2013年，67頁。
- 7) ①『わらべうた・二声三声歌唱集うたはよいものだ』全音楽譜出版社，1972年，135頁。② Mother Goose ラボ教育センター編著『「おはよう」から「おやすみ」まで親子で楽しむマザーグース ベビー編』ラボ教育センター，2006年，52頁。百々佑利子監修『マザーグースとあそぶ本』ラボ教育センター，1986年，82頁。③一般的にこの歌い出しで親しまれている。④「鹿児島市私立幼稚園協会編『うたとあそび』1990年，60頁。『Twinkle, Twinkle, Little Star』の歌詞が日本語訳に編曲された曲である。マザーグースの一つに分類されている。
- 8) 5節を筆者が併記した。英語原詩と日本語訳の歌詞は，百々，前掲書，82頁。
- 9) 皆川達夫『合唱音楽の歴史改訂版』全音楽譜出版社，1974年，5頁。
- 10) 文部科学省，前掲書，162頁。
- 11) 鶴巻保子，木原英子「〈こどもバンド〉の活動報告－特徴ある音楽アンサンブルの起こり，発展，可能性－」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要第44号』2016年，111-130頁を参照。
- 12) 文部科学省，前掲書，170頁。
- 13) 樋口昭「わらべうた」『新編音楽中辞典』音楽之友社，2002年，788頁。
新村出『広辞苑』岩波書店，1955年，2766頁。
- 14) 小島律子「学校音楽教育におけるわらべ歌の再考－「教材」としてのわらべ歌から「経験」としてのわらべうたへ－」『大阪教育大学紀要第V部門第58巻第1号』2009年，44頁。その旋律の音組織は日本の音階を基とするため，童謡や唱歌は含まず，遊び歌であることから，言葉と動きを伴っていることを前提とする」
- 15) 尾見敦子「幼児教育におけるわらべうたの教育的意義」『川村学園女子大学研究紀要第12巻第2号』2001年，87-88頁。
- 16) 新村出，前掲書，2766頁。
- 17) 阿部ヤエ『「わらべうたで」で子育て入門編』福音館書店，2002年，102頁。
- 18) 例えば古賀弘之，神谷良恵「子育て支援における〈わらべうた〉の役割」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究20号』2014年，15-29頁。
- 19) 小泉文夫『わらべうたの研究 研究編』わらべうたの研究刊行会，1969年，284頁。

20) 同上, 256頁。



写真1

輪唱〈きらきら星〉を聴く子どもたち
すこやか子育て交流館／りぼんかん夏まつり
2016（平成28）年8月7日



写真2

わらべうた遊び〈はないちもんめ〉をする学生たち
平川セミナーハウス／オリエンテーションキャンプ
2015（平成27）年4月25日